

学生・卒業生・教員による合同写真展

## STILL CRAZY -地平線の向こうに

### 広川泰士

1950年神奈川県生まれ。写真家、東京工芸大学芸術学部写真学科教授。1974年から写真家としての活動を開始。広告写真、TV コマーシャルなどの最前線で活躍するかたわら、旺盛な好奇心で世界を舞台にその独自の視点で人間や自然を鋭く観察し自らの作品としてフィルムに残して来た。大型カメラを携えて世界を旅行する写真家でもある。

1988年の写真集『sonomama sonomama』は、イッセイミヤケやコムデギャルソンなどのブランドファッションをワゴン車に積み込み、日本の田舎を巡りながら農夫や漁師、大工や雑貨屋、アマチュア考古学者に至るまで、自然とともに生活する人々に出会ったその場で、ブランド品に着替えてもらい撮影したものである。広川のユーモアのセンスが光る作品である。1991年から取り始めた原子力発電所の風景写真は全国に及び、当時現存する原発 53 基を撮ったもので 94年に『STILL CRAZY』として刊行。福島原発事故が起こる 20 年も前に、不気味な存在としての原発を捉えていた広川の想像力が注目を集めている。

2002年の『TIMESCAPES-無限旋律-』は悠久の時の中に存在する岩山と星の光を同時に捉えようとする試みで、それはまた宇宙の中での人間の位置を問い返すものでもあった。撮影地は 1991年 9月 8日から 9日にかけてのカリフォルニア州北方の地オーエンズ・ヴァレイに始まり、ネヴァダ州北方のピラミッド・レイク、93年のオーストラリア、94年のオマーン、シリア、青森、95年のヨルダン、96-97年のモンゴリア、98年のボリビアやナミビア、99年のエジプトのシナイ砂漠の南南西の「モーゼの山」、2000年のチリ、そして 2001年 6月 21日から 22日にかけてのユタ州北西部キャシードラル・ヴァレイに至る。

2005年の写真集『Whimsical Forces -時のかたち-』は枯れ葉を撮った小品であるが、透徹した自然の観察と生命の本質を捉えようとする直観が一つになった佳品である。

東日本大震災を契機に広川は福島県相馬市の人々と写真展「家族・写真」を青山ブックセンターで開催するようになる。昨年の暮れに出版された『南砺』は自然の大地に支えられて生を営む富山県南西部の人々の暮らしぶりを正面から捉えた力作である。

\*\*\*

本展は本学教員の広川を中心として、さらに卒業生や学生たちを加え、彼らが東日本大震災に対してどのように応答しようとしたのかを示そうとするささやかな試みである。

2013年 2月

村山康男

東京工芸大学芸術学部写真学科 教授